

192. 富波古墳の再検討

—出土遺物や形態から—

1. はじめに

野洲町大字富波字亀塚には、1982年4月に滋賀県経済農業協同組合が宅地造成を計画し、その事前調査において発見された富波古墳がある(第1図)。その後同古墳は史跡に指定され、当地区における開発は中止された。この調査において、富波古墳の全体像はほぼ分かったのであるが、東隅の同溝部の一部が隣接地に及んでいた為、厳密な意味での全容はつかめていなかった。ところが、今回その隣接地の開発申請が上がり調査を行うことになった。その結果、図に示しているような調査結果を得ることができ、それと同時に富波古墳の実態もつかめたことから、これを機会に同古墳の意義や特異性などについて、若干触れてみたいと考えるのである。

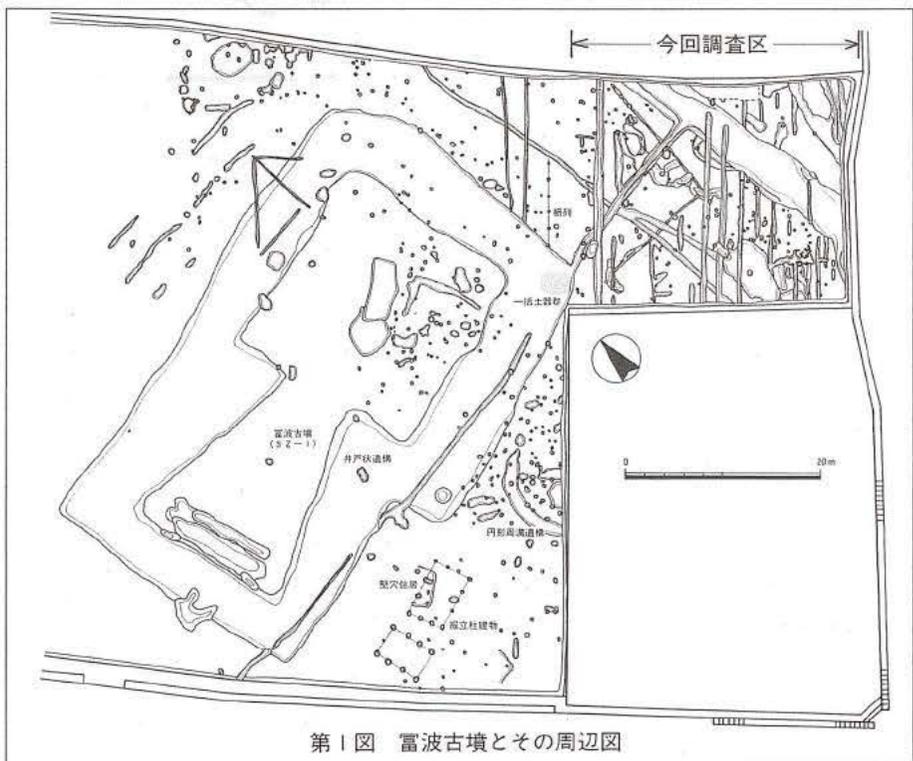
2. 前回の調査概要

前回の調査の結果検出された遺構は、調査区中央に前方後方型周溝墓が存在し^①その南東側にも周溝墓とみられる円形の遺構が確認されている^②。その他南隅においては、竪穴住居跡や掘立柱建物の一群がみられ、また東隅においては柵列や前方後方型周溝墓(以下SZ-1とする)と平行にはしる溝状遺構などがみられたのである。簡単ではあるが、以上が前回の調査の概要である。これ以下は、今回の調査区から出

土したSZ-1に伴うと思われる土器(東隅の一括土器群の縁辺で出土)を考察し、前回出土した土器とも照らし合わせて、それらに社会的、歴史的、地理的背景などを加味して、富波古墳の再考察を行ってみたい。

3. 出土遺物の検討

第2図の枠内2点の土器が今回の調査の出土遺物である。①のいわゆる近江型の「受口状口縁甕」は、口縁部から肩部と底部の一部しかみつからず、推定復元となった。復元口径約12.5cm、器高は約21cmを測る。比較的張った肩部から、やや緩やかに屈曲した口縁をもち、二段目の口縁部も立ちあがりはなだらかである。口縁端部には面をもち、外傾ぎみに若干ひきだされている。底部は平底で中央部をやや上げ底にしている。器厚は3~4mm程度で薄い。外面の調整はハケメ調整が行なわれており、肩部から底部付近まで、体部一面に及んでいるのがわかる。内面は軽く削っているようにもとれるが、基本的にはナデで仕上げている。底部の近くにヘラケズリを行った痕跡も認められるのであ

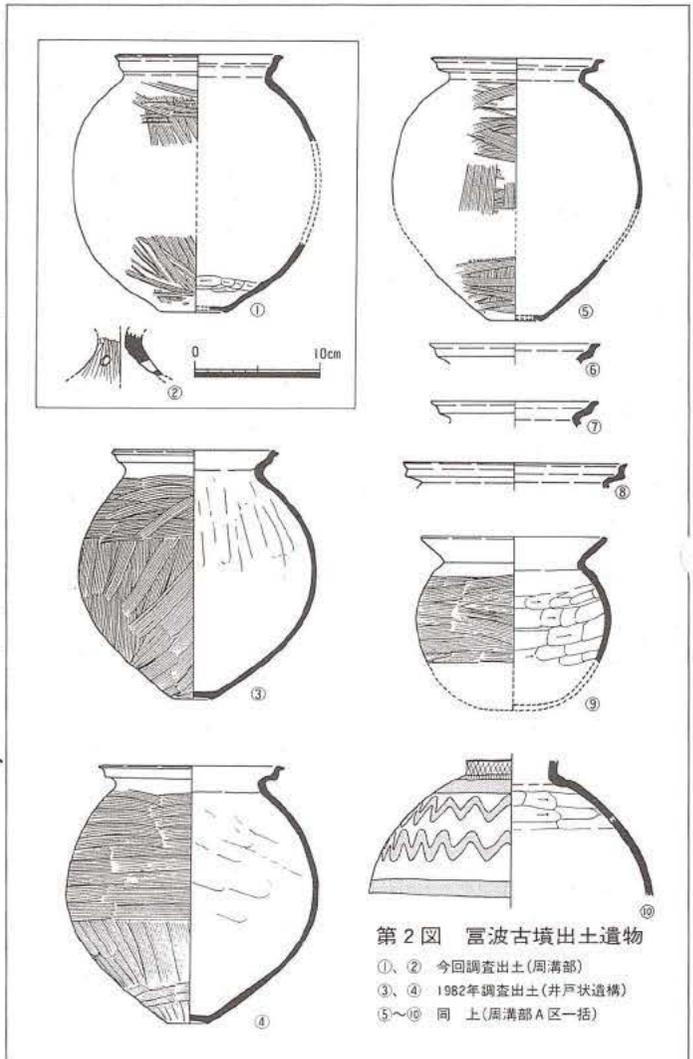


第1図 富波古墳とその周辺図

る。②は高坏の脚頸部である。三方に透孔をもち、外面を丁寧なミガキによって仕上げられたものであり、充填部より上の坏部や脚の裾部は欠損して、全容は把握できない。これら今回出土のもの、前回調査の際に出土した遺物(①~⑩)を比較してみたい。③、④は前回の報告で井戸状遺構と称されている箇所から出土したものである。③、④ともに外面はハケメ調整を行っているが、③は肩部が横方向、それ以下がタテやナナメ方向のハケメを施しているのに対して、④は横方向のハケメ調整が中央以下の所まで及び、底部付近にもなされているのが特徴的である。内面はともに①と同様の方法による仕上げがなされているが、底部付近のケズリはみられない。③、④の方がやや尖底である点や、口縁部の立ちあがりなどをみると、若干①よりも先行するかもしれないが、おおよそとして同じ型式をもつものと考えられるであろう。⑤~⑩は周溝部東隅の今回調査の場所に隣接する、一括土器群の中から出土した遺物である。⑤の受口状口縁甕も①、③、④と同様、外面はハケ調整、内面はケズリの後ナデを施している。上げ底の底部形態も同様であり口縁形態はどちらかといえば④の甕に似ているといえよう。⑥、⑦、⑧の甕は、いずれも口縁部のみしか残存しておらず、体部以下を欠損する。一段目の口縁は外方へつよくひきだされ、ほぼ垂直に立ち上がり、端部をあまりつまみだしていない。⑧の甕の口縁が先行する形態であるが、⑥、⑦は前挙の甕と時期的な差はさほどみられない。⑨は小型の「布留甕」といわれるものである。体部の下半以下を欠損するこの甕は、肩部に明瞭な段をもち、それ以下の外面には、横方向のハケメを施し、内面も同様方向のケズリを行っている。「く」の字に屈曲する口縁形態を有し、口縁部は内外面ナデ調整である。いわゆる「布留甕」の特徴である端部内面に肥厚させた口縁をもつもので、この畿内式の甕が当時期の当地域において近江型の甕と伴出しているという点は、後々のためにも資料的有効性をもつものといえる。パレススタイルの壺⑩は、頸部に貼り付け凸帯を巡らせ、肩部と体部中央に2本の平行する帯およびその間に連続する2段の山形をヘラミガキ調整の後に丹で塗っているものである。内面は肩部にヨコ方向のケズリがなされ、頸部には接合の際のものとみられる段がある。体部下半以下は欠損して全容はつかめないが、おそら

く平底形態であると思われる。この壺は、東海系(具体的には尾張地方)のものであり、同地域からの搬入品である可能性が極めて高い。

このように、周溝内出土遺物についての概略を説明してきた。これからは、それらの相互性や独自性を踏まえて検証していきたい。③、④、⑤の受口状口縁甕は、口縁の立ちあがりや端部の処理方法、つまみ出しの程度等若干の差はみられるが、いずれも最大径が体部中央かやや下にあり、かつ底部に尖底ぎみの平底形態を有する。口縁部径も13~14cm前後であり、器高も20~22cm程度と共通点が多い。調整方法もほぼ同じであり、これら3つの甕は、ほぼ同時期の所産のものと考えられ、よってこれら3つの甕の共通性は高いと言える。これら3つと今回出土の①の甕との比較を行ってみても、決定的な型式的相違はみられず、やや体部が球形化している点以外は、前挙の3例となんら変わらない



第2図 富古墳出土遺物

- ①、② 今回調査出土(周溝部)
- ③、④ 1982年調査出土(井戸状遺構)
- ⑤~⑩ 同上(周溝部A区一括)

ことからして、この4つの受口状口縁甕に時期的な同一性が認められるであろう。口縁部しか残っていない⑥、⑦、⑧の遺物であるが、口縁部径や口縁形態は、極めて4例と酷似し、時期差は認めがたい。しかし、⑧の口縁は、前述したようにやや先行するものと思われる。今回の検証の中において最も重要なものが⑨の小型甕の存在である。これは、もう既に述べているように、口縁端部内面を肥厚させた特徴をもち、内面ケズリも頸部よりやや下から行っているという、いわゆる「布留甕」と呼ばれるもので時期決定に有効である。近江系の甕だけを見ると、尖底や平底形態など庄内的要素もないことはないが、⑨の甕の共伴例がこれら周溝部出土の一群に対する年代把握のカギを与えてくれたことができるのである。前回の報告においては④これらの一群を庄内～布留式のものと考え、その中でも古富波山古墳よりも先行するという知見から、富波古墳は確実に庄内期のものとして考えられていた。しかし、以上のように、出土土器の観点からいうと明らかに「布留式」段階のものであり、とうていそれよりも先行するとは考えにくいのである。

4. 形態による検討

次に、この前方後方型周溝墓に形態や歴史的背景を加味して、再検討してみることにする。

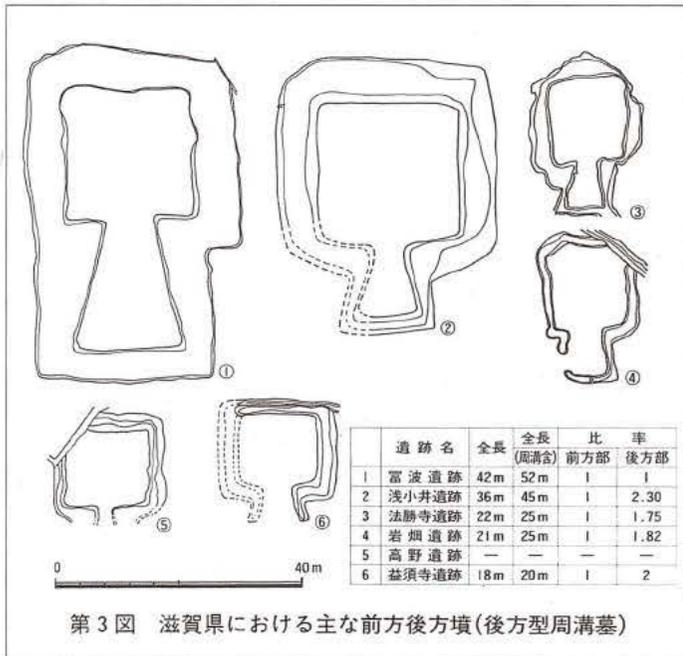
まず大切なことは、このSZ-1が古墳と呼ぶべきものなのか、それとも周溝墓なのかということである。それは、いつからを古墳とよび、いつまでがそうでないのかという根本的な事象にまで発展することになる。そもそも、前回の報告における指標では、古富波山古

墳を布留式土器の直前において、それよりも周溝墓が先行するという観点から結論を述べてきた。しかし、様々な事象を考慮する必要があるだろう。まず第一に近年県内においても、各地で前方後方型周溝墓と呼ばれるものが多く見つかっていることである。坂田郡近江町の法勝寺遺跡では、1987～1988年の調査において全長22mの前方後方型周溝墓が発見されている^③この調査の結果、前方部先端中央の周溝斜面で庄内式併行期を溯り、畿内第5様式式併行である土器が出土しこの遺構の年代の基準としている。また近江八幡市浅小井(高木)遺跡でも法勝寺遺跡のものと同時期とみられる全長36mの前方後方型周溝墓もみつまっている^②一方、1984～1986年に調査が実施された栗東町の岩畑遺跡においても、周溝内出土遺物より、布留式併行期と考えられている全長21mの前方後方型周溝墓が確認されている^④その他、1979年に調査された守山市の益須寺遺跡や^⑥1985～1986年にみつかった栗東町の高野遺跡における前方後方型かどうかわからない周溝墓など^⑤も存在しているが、これらの遺構が前方後方型をとるのかどうかということは不明である。

上記のように、県内においても富波古墳より溯ると思われる時期の前方後方型周溝墓もみつまっているのであるが、私はこれらの周溝墓と富波古墳(あえて古墳という)の間には格差を認めざるを得ないのである。具体的にいうと、まず富波古墳の全長が42mにもなるのに対して、他の周溝墓は20～35m前後と規模が小さいということがあげられる。その他に、富波古墳を古墳と考える理由に、主軸方向における前方部と後方部との長さの比が問題になる(第3図)。これをみて分かるように、富波古墳の時期以前の長さの比は、およそ2:1前後と後方部の方が長い。つまり、これらの周溝部の張り出し部分は、定型化した古墳にみられるようなしっかりとした大きい前方部というよりは、むしろ方形やバチ型をした檀のようなものではないだろうか。時代が下がると、方墳に造り出しがつくことや帆立貝式古墳のような形態をとる例もあるが、古墳出現期の段階において、前方部の未発達形態を残しているこれらのものはやはり周溝墓の域は越えられないと考えるのである。

5. 小括

以上、富波古墳の位置づけについて若干の考察を試みてきた。当初は前方後方型周溝墓と考えられていたこの古墳も、その後それよりも先行すると思われる前方後方形をした周溝墓の相次ぐ発見や、今回の周溝



第3図 滋賀県における主な前方後方墳(後方型周溝墓)

部からの出土土器の検討によって、その本当の性格を明らかにし始めたといえよう。これよりも後出するという古富波山古墳についても、その古墳の鏡の存在^⑧は定型化した古墳造営プランの範疇にあるといえ、前期古墳の3大必須品目に従うならば^⑨古富波山古墳の古墳の様相は確固たるものになるだろう。そのような意味からも鏡等は見つかっていないが、それより若干先行するという富波古墳が、古墳である公算は極めて高いといえる。また、被葬者の権力の証しとして周囲から独立し、「見せる」ためのものでなければならぬ古墳が「前方後方(円)形」という、中央とのつながりを示すものとして効果的であったことも想像に難くない。そういう意味からも、浅小井遺跡や高野遺跡、益須寺遺跡のように、前方部の発展途上段階にあるものに古墳の様子を伺いとすることは難しく、また、比較的前方部の発達している法勝寺遺跡や岩畑遺跡においても他の周溝墓と同じ墓域にあって周溝を共有したり周溝が不完全であったりして(地面の傾斜も影響するであろうが)、決定的要因に欠けるものである。それらに加えて、前者の周溝墓に造りだしのついている程度のもものは周溝がしっかりとしている点が挙げられるのに対して、前方後方型に近づいている後者は、周溝の粗雑さが目立つ。このようにみえてくると、やはりこれらの一群は、周溝墓から前方後円墳への過渡期のもので、手探り状態にあったといえ、富波古墳に前方後方墳の成立形態というものを求めるのが妥当であるように思われるのである。

では、具体的な時期として、いつ頃を挙げるのかという問題が残るが、上述してきたことをふまえて、私は、石野氏のいう纏向4式^⑩寺沢氏という布留1式墳^⑪に比定できるものと思われ、3世紀末～4世紀初頃と考えたいのである。

今回は、史跡富波古墳の東隅周溝部にかかる調査を行った一環として、古墳それ自体の特質について若干私見を述べてみた。本来であるならば、富波遺跡の中におけるこれらの古墳の位置づけなどを行わねばならないのであるが、それらは、次の機会に触れさせていただくこととし、今回は筆をおきたいと思う。

〈補足〉

今回の小稿は、今年度発行予定の『富波遺跡一(富波遺跡発掘調査報告)』野洲町教育委員会、1992、3に掲載されているものに若干の補足を行ったものであることをお断りしておかねばならない。尚、その他詳細な点については、同書を参照されたい。

(角 建一)

注

① 前方後方型周溝墓という呼称は、1983年刊行の野洲町教育委員会『富波遺跡発掘調査概要』、1983、3

に従った。

② 1990年の調査において、空白の部分の調査がなされており、その際、円形周溝状遺構のつづきが検出されており、ちょうど北側の部分が陸橋部になって開く形となることが確認されている。

③ 前回の報告書では、調整がベルトによる図示であったが、今回はすべての範囲において見ようという観点からとりやめた。その為、⑤、⑥、⑦、⑧を除く残りの4つについては、花田勝弘氏から実測図をお借りするという多大な御協力を得た。花田氏にはその他にも、若輩な私のために様々な面でお手を煩わせた。記して感謝の意を表したい。

④ ①挙書66～67頁において、「古富波山古墳から墳丘築成時を示す一括遺物群は、富波遺跡のそれに対比してみると、少し年代の下ることが判然としている(中略)一このような時期は、畿内における庄内式と布留式の接点に位置し、微妙な時期といえる。ここでは、一応布留式土器の直前と考えており、一(中略)一布留式土器の出現直前に、古富波山古墳の年代を置いた場合、富波遺跡はそれ以前の段階、すなわち、庄内期に確実に入るものとみなすことができる」としておられる。

⑤ 近江町教育委員会『近江町文化財調査報告書第6集—法勝寺遺跡—』1990年

⑥ 滋賀県教育委員会、勸励滋賀県文化財保護協会『県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書Ⅲ—浅小井(高木)遺跡—』1986年

⑦ 栗東町教育委員会『栗東の歴史 第1巻』1988年

⑧ 守山市教育委員会『益須寺関連遺跡発掘調査報告書』1981年

⑨ 平井寿一「埋蔵文化財調査考 高野遺跡I」『栗東の文化 Vol.7』1986年

⑩ 丸山竜平「大岩山古墳群に占める富波遺跡、前方後方型周溝墓の位置—古墳出現期の一樣相」『富波遺跡発掘調査概要』1982年において、「明治29年に地元住民が墳丘上から、陳氏作四神二獸鏡」王氏作四神四獸鏡、三角縁三神五獸鏡と呼ばれる舶載鏡を掘り出した」と記している。

⑪ 近藤義郎『前方後円墳の時代』1983年の中で、「成立時の前方後円墳をそれ以前の弥生墳丘墓と区別する特色のうち主要なものとして三つを挙げれば(1)鏡の多量副葬指向、(2)長大な割竹形木棺、(3)墳丘の前方後円形という定型化とその巨大性となる」としている。

⑫ 奈良県立橿原考古学研究所『纏向』1876年

⑬ 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』1986年